

日本語の起源、解明方法と数値評価

The Origin of Japanese Language ; Solving with the Approach Method and Numeric Estimation

永田 良茂 (地名/語源研究家)

Yoshishige Nagata (Place Name & Ethnology Reseacher)

神戸市北区泉台 2-9-9

2-2-9, Izumidai, Kita-ku, Kobe-City, Jaoan

あらまし：日本語の系統問題は長い間系統不明の孤立語とされて、混合語説が有力視されるも起源問題は未解決である。「言葉とは何？」の本質の追究からこの問題を決着する方法を考え、比較言語学の立場から基礎語彙による親縁関係を見てみると、日本語もアイヌ語も8割近くが南島語族に親縁関係を認めることが出来た。特にアイヌ語は縄文語を引き継ぎ、南から北の北海道に閉じこめられた結果成立した言語、文化であることを示している。近隣諸言語の語彙の親縁関係比較判定には音韻類似度を定義して数値評価を加えた。

Summary : The Japanese Language has been called an isolated Language because it belongs to the unknown linguistic group and recently considered as a blend between Altaic and Austronesian language families , however its origin has not been determined conclusively.

This paper , using the approach method and the question “what are words ?” as a base , indicates that from the view point of comparative linguistics there is an 80% between Ainu and Japanese in the Austronesian language family . The Ainu language had specifically been resume to have reached Kokkaidou by way of the Japanese Islands from the south and had been isolated simialities of the vocabularies .

For the Comparative Judgement of the similarity of the vocabularies of the neighboring Languages, we made use of numeric estimation by the defined rate of the phonological similarity between the two vocabularies of the different languages,

キーワード： 比較言語学、 言語年代学、 縄文語、 日本語、 アイヌ語

Keywords: Conparative Linguistics, Glottochronology, JOMON Languages, Japanese Languages, AINU Languages

1. はじめに

第12回公開シンポジウムにおいて、「言語年代学における日本語の系統、縄文語を推定する」 [1] という表題の報告をさせていただいたが、今回の発表はそれを発展させたものである。

「言葉とは何？」の言語本質の追究から言語起源の追求方法をまとめ、その方法に基づいて広く、中国語等を除いた南島語族やアルタイ語派の日本周辺の語彙調査を行い、調査結果は『日本語の起源とアイヌ語』 [2] として出版した。

その中から解明方法といくつかの具体的な語彙の

親縁関係調査結果を例示して、調査結果としては基礎語彙における日本語とアイヌ語との親縁関係を数値評価として出すことが出来たので報告する。

M,スワデッシュの言語年代学のうち、彼の試行錯誤した基礎語彙100語を、時代を経ても変わりにくい語彙と考え、その語彙を構成する音韻と意味との範囲を広げて親縁関係を調べたものである。

特にアイヌ語に対しては音韻記号による音韻類似度を定義して、困難が予想される親縁関係判定を評価してみた。

2. 日本語研究の流れ

我が国の言語系統論争において、約百年前に藤岡勝二がウラル・アルタイ語における14ヶ条の特長を示し、そのうち13ヶ条は日本語にも当てはまると主張し、その後橋本進吉などの上代仮名遣い（8母音説）や母音調和の発見などが相次ぎ、14ヶ条が成り立っていたことがわかり、日本語系統のウラル・アルタイ語説が多くの学者に支持されるに至った。

また、明治末年の日韓併合と重なり、金沢庄三郎は『日韓両国語同系論』を発表して、支持する人も多かった。

戦後になると、戦前にアルタイ語を学ぶためにベルリン大留学を行なった村山七郎は、日本語は南島基層語にアルタイ語が重層した、混合語説を主張し今日の主流になりつつある。

近年も（1986年）国立民族学博物館の共同研究テーマとして「日本語系統論の方法に冠する基礎的研究」と題して、言語学、民族学を含めた多くの学者を動員しての検討がなされ、『日本語の形成』[3]として成果報告がなされているが、「日本語の源流」を目指した報告にはほど遠く、各学者の従来の主張を列記したものであり、「サワラヌモノニ、タタリナシ」的な従来の「系統不明な孤立語」としての立場を強調するような結果にしかっていない。

その中で従来の研究の方法を整理し図解した下図はうなづけるものである。語彙論を中心とした研究では南島語族との類似がクローズアップされ、形態論・統語論を取り上げるとアルタイ語派との類似が鮮明となることは明らかである。

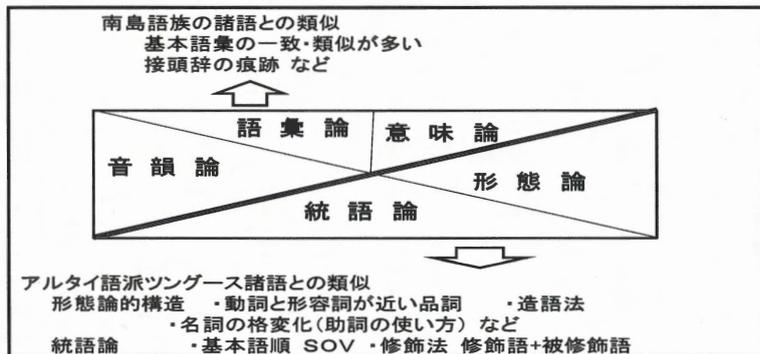


図 1.日本語系統追求の主な方法論

注記：

『日本語の形成』[3]の中の「類型から見たギリヤーク語-日本語との関係において」から中の図を借用し、周囲の補足説明を筆者が行なった。

3. 日本人論

国立科学博物館のホームページ「日本人はるかな旅展」において、世界中の現代人は、ホモ・サピエンス（新人）という一つの種に分類され、アフリカに10万年前に誕生し、下図のように広がった説が有力であることを伝えている。

図 2. 新人（ホモサピエンス）の拡散



日本語の起源を取り扱う場合にこれらのどの渡来

図中、日本列島への主な到来を時代順に見ると次のようになる。

- ①マンモスハンターと呼ばれる大型狩猟人（最終氷期）
- ②朝鮮半島を経由した南からの渡来（縄文期直前）
- ③「海上の道」を来た渡来（縄文期）
- ④難民としての大陸からの海上渡来（縄文末期～）

が有力な「日本語の源流」となったか、であろう。

4. 日本語起源調査に必要な考え方と方法

4. 1 基本的な考え方と方法

村山七郎によると、ヨーロッパでは19世紀前半に言語の親縁関係という考え方が確立し、仏人メイエの考え方として、「言語記号の任意性」がその親縁関係の土台をなすと、紹介している。[4]

「言葉とは何？」に対する回答が「言語記号の任意性」であり、言葉とは「音」と「意味」の組み合わせからなり、文字記号で表したものが「言語記号」に相当し、「音」と「意味」の組み合わせ関係には必然性がない、無関係であることを「任意性」と言っているが、その組み合わせ関係は、ただ文化遺産としての伝承に基づくところに重要な意味合いを持ち、異なる言語間で同じ言語記号が見つかることは共通祖語から受継がれた共同遺産として保存されてきた可能性が大きいことを示すのだそうである。

この考え方を基に日本語およびアイヌ語の起源を調査する方法・考え方を次のようにまとめてみた。

4. 2 日本語・アイヌ語の特長など

村山七郎の著作などから、日本語およびアイヌ語の特長がなぜ生じたのか、本源的なものかどうか、南島諸語との比較に必要なことなどを若干まとめてみた。(〔1〕の内容にほぼ同じ。)

(1) 日本語とポリネシア語の類似性から

ハワイ語などのポリネシア語など、日本語と同じ5母音であり、重母音・重子音を許容せず、日本語古語と同じく濁音のない子音のみの簡易な音韻であり、母音終わり(開音節)の単語でありカタカナで書いても通じる言葉である。(大野晋のタミル語起源説のタミル語の特徴とも一致)

しかし、これらの特徴は本源的なものではなく、南島諸語の中の中心、インドネシア語派が拡散してメラネシア語派、ポリネシア語派と二次、三次的に拡散した結果であり、日本語も二次、三次的に拡散した結果であることを示しているようである。これらの言語の共通の特徴は民族移動とともに言語接触を繰り返し、より簡易な音韻に落ち着いた結果に思える。

図 3.日本語系統親縁調査に必要な方法の考え方

1.言葉(語彙)

「言語記号の任意性」→ 語彙比較の重要性

2.言葉の組織的な調査方法

言葉は時代と共に変わるが、変わりにくい語として、基礎語彙がある。

M.スワデッシュの基礎語彙100語を採用。

3.伝搬ルートを想定した広域の語彙調査が必要

上記の図 2.の到来ルートが参考になる。

スワデッシュの基礎語彙100語における言語年代学については、第12回公開シンポジウムの「言語年代学における日本語の系統、縄文語を推定する」[1]で取り扱ったが、今回は時代を経ても変わりにくい語彙に重点を置き、語彙の「意味」と「音」との類縁関係を広く調査した。

ポリネシア語の開音節語に関して、単語には露出形(独立名詞)と被覆形(従属名詞)とがあり、露出形は開音節であり、被覆形は閉音節が保存されており、元々は閉音節があったことを示しているそうである。(日本語の被覆形の例；白(シロ)に対して、白(シラ)魚、白(シラ)サギなど。インドネシア語派の場合は露出形の場合にも閉音節語が多い)

日本語の場合も同様に語末尾子音はとれるが被覆形においては保持されているものがあるようである。(動詞語幹など、「開ク」の例；ak-、「聞ク」の例；kik-)

アイヌ語には閉音節の単語が多く、古い形を残している。(台湾諸語も同じ) 日本語の場合には被覆形でも開音節であるが、原始日本語では閉音節語(VC, CVCなど)があったらうと言われている。

また、日本語の露出形、被覆形の単語の古形は双方の音韻を含む場合が見られる。

(例：「ヒ(火) :pi」に対して「ホ・ノ・ホ(炎) :po」から祖語*(a)poi が復元される)

(2) 二音節語と単音節語

日本語は2音節の語（VCV, CVCVなど）を基本としており、ポリネシア諸語などと共通な特徴であると見られており、日本語の単音節語の多くが古語では重母音語であったと言われている。一方、アイヌ語は単音節語を基本としていると考えられている。

しかしこのことも本源的ではなく、南島諸語の場合は接辞と語幹の各1音節の組み合わせの場合が多く、もともとは一音節で、アイヌ語の場合には長い年月の間に2音節語が1音節語に圧縮された「幹収縮」の形を取ったものが多く見られる。その結果、この概念化された語幹語により多くの合成語を形成できるようになったものではないだろうか。「アイヌ語はもとをただせば数百の単語から成り立ったもの」などの田村すす子の言葉が思い出される。

また「アラタ（新）シ」が「アタラシ」になったように、アイヌ語には南島諸語から子音間、母音間、子音・母音間の前後の入れ替わった「音位転換（メタテーゼ）」の例も多く見られる。

(3) その他の南島語的な特徴

アイヌ語は接辞（接頭、接尾辞）を駆使した言葉であり、南島諸語的であり、抱合語に分類されている。日本語においても「マッシロ（白）」、「マッサオ」などの接尾辞“ma-”はインドネシア系言語に見られるものだそうである。また、インドネシア系言語には前鼻音化形の接辞（“[me]N-”など）があり、その痕跡が日本語にも見られるそうである。

また、日本語には少なくアイヌ語には多い語頭の“r”音であるが、南島祖語の“*d”音に対応するもので、日本語ではさらに“l”音などに変わったもので、はと言われている。

一方、アルタイ語派は接頭辞がなく、接尾辞を駆使し、特に動詞の語尾変化による動詞活用などはアルタイ語的特長である。また、助詞、助動詞の駆使による多様な文の構成などもアルタイ語的で、膠着語と呼ばれる所以である。

5. 基礎語彙調査

5.1 基礎語彙について

M.スワデッシュは考古学における炭素14（¹⁴C）による遺物年代測定にヒントを得て、2言語間の分離年代を測定する言語年代学を1950年代に打ち立てた。当初は13言語の215語の語彙を使用した。最終的に基礎語彙100語を試行錯誤の上、使用した。

我が国で日本語と18ヶ言語間でこれを試みたのは服部四郎で、『日本語の系統』にその結果が報告されている。このような調査方法では日本語系統は決められないと調査の失敗を認めている。

村山七郎は『日本語の研究方法』の中で、服部の日本語と朝鮮語との類似語19語に対して、個々にコメントし4語しか類似が認められないと厳しく批判し、基礎語彙に相当する各語の語彙選択の困難さ、言語年代学の妥当性を疑問視している。

そこで年代の算出をあきらめて、時代を経ても変わりにくい語彙としての基礎語彙の価値に注目し、関連語彙の「意味」と「音」の範囲を広げて関連語彙も考慮して、公正な親縁関係の判定に努めた。

5.2 調査の具体化

スワデッシュの基礎語彙100語の各語彙に対して、それに相当する南島祖語を上部に、日本語、アイヌ語および沖縄本島語・八重山諸語を左欄に、インドネシア・フィリピン諸語、台湾諸語、メラネシア語派およびポリネシア語派の語彙を右欄に配置し、南島祖語との語彙類似と左右欄の語彙類似の認められるものを線で結び、語彙調査表として図表に示した。（例として 表 1. 参照）

またその語彙の集約結果として、日本語またはアイヌ語語彙群とインドネシア・フィリピン諸語、台湾諸語、沖縄・八重山諸語、アルタイ諸語およびアイヌ語または日本語との語彙類縁関係判定を○△×（-）の3段階で判断し、表にまとめた。

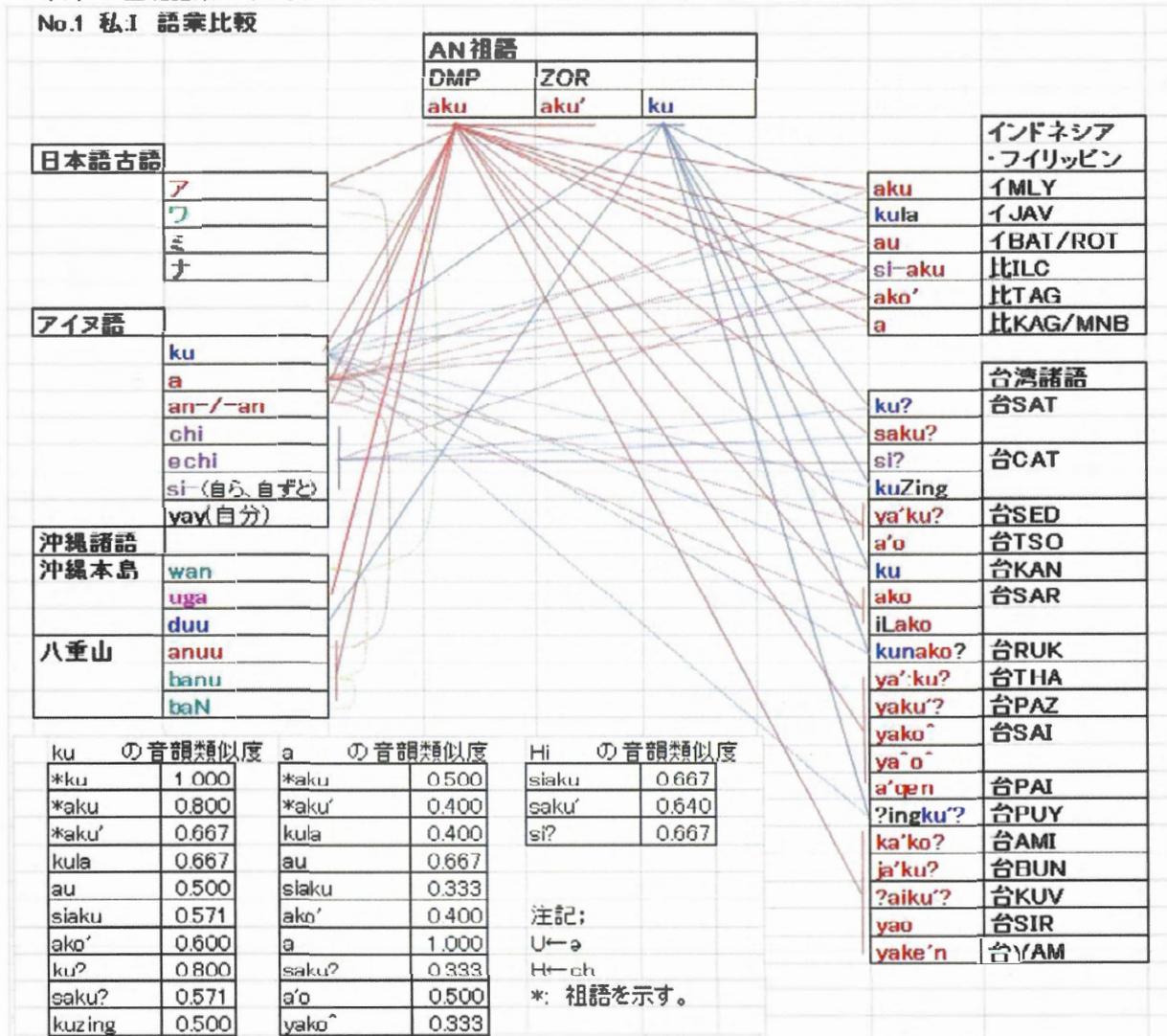
（例として表 2/4.および表 3/5. 参照）

また判定・評価の根拠を（……>……）などの変移推定で示した。*印は復元南島祖語を示す。音声記号はここでは印字フォントとの整合性を考えて次のように置き換えた。y→R, η→N, ?→'（声門閉鎖音（グローバルストップ））

5.3 語彙調査の具体例

(1) 基礎語彙No.1 私: I から

表 1. 基礎語彙調査 私: I の例



この表から考えられる語彙関係を補足する。

- ・ここで示した大部分の語彙が南島祖語との類似が認められ、その派生と考えられ、祖語からの変化を感じ取ることが出来て、日本語、沖縄語およびアイヌ語もその中にあると思える。
- ・日本語およびアイヌ語の“a”はフィリッピンTAG(タガログ語)またはMNB(マノボ語)と同じであり、独人O.デンプウォルフの南島祖語“aku”またはR.D.ソルクのaku'からの語頭の幹収縮(Stem Shortning)形になっている。
- ・アイヌ語kuはソルクの南島祖語*kuをそのまま継ぎ、台湾諸語KAN(カナカナブ語)などと同じである。
- ・八重山諸語の中でanuu, banu, baNは南島祖語akuの音韻変化から引き継がれたものと考えら

れる。濁音化・鼻音化・清音化の中で子音kは
k → N(=ŋ, ng/g) → n
の変化は一般的であろう。(

またanuuなどから幹収縮形としてアイヌ語an-/-anがある。なおこのan-/-anの用法に関して、村山七郎は所有接尾辞-anの使い方は単なる所有ではなく、血縁関係や身体部分とかを表わす名詞に限り使用され、必然的な切り離し得ない所属性が表現されるとしメラネシア諸語の所有接尾辞の用法特長と同じであることを指摘されている。

- ・沖縄語ugaは一見、南島祖語akuと無関係に見えるが、南島語に多く見られるakuのメタテゼ形ukaの濁音化ugaであり、古語の「ワ」、「ワガ」への転訛が十分に考えられる。

*aku → (uka) → uga → ua(=wa)

古語 ワ → waga ワガ

この anuu の uu は長母音を示す。(重母音ではない。) また、沖縄・八重山諸語の

wan/banu/baN → wa 古語 ワ

への転訛・幹収縮化も十分に考えられる。

- ・アイヌ語 chi, echi, si- は台湾諸語CAT (チウリ・アタル語) si? などと同じである。
- ・日本語古語 「ミ」、「ナ」はアルタイ系であろうと言われている。

上記のような言語間の実証が言語系統問題の解決に不可欠であることを予想できる。

特に、「我が(君)」の古語の変化、「ア・(ギミ)」、「アガ・」、「ワ・」、「ワガ・」などが沖縄諸語の中に変化の痕跡を残しているようである。

これらの語彙類似関係をアイヌ語および日本語(古語)にまとめ次表のような類縁判定にまとめた。

なお、アイヌ語に対しては次式の音韻類似度を定義して語彙の類似度評価を試みてみた。

音韻類似度 =

$$\frac{2X \text{ (対象語と被対象語の音韻記号の一致数)}}{\text{対象語の音韻記号数} + \text{被対象語の音韻記号数}}$$

表 2. アイヌ語の 私 : | 類縁判定結果

表 6.1.2 アイヌ語の親縁関係の判断結果

	南島祖語	イ・比諸語	台湾諸語	日本語	沖縄諸語	アルタイ語派
アイヌ語	○	○	○	○	○	-
a / an	a<*aku	a<aku/ako/saku	a<a'o/ako/... ..	a=ア	an-/-an	bi :MON
ku	ku=*ku	/... ..	ku=ku(KAN)		< anuu/banu/baN	OJ: ミ<*bi/*man(TU)
chi/echi		a=a(比KAG/MNB)	/ku?(SAT)			OJ: ナ<na(アkor)
si		si/chi	si/chi=si?(CAT)			
		<si-aku(比ILC)				

表 3. 日本語の 私 : | 類縁判定結果

表 6.1.3 日本語の親縁関係の判断結果

	南島祖語	イ・比諸語	台湾諸語	アイヌ語	沖縄諸語	アルタイ語派
日本語	○	○	○	○	○	○
ア	a<*aku	a<aku/ako/saku	a<a'o/ako/... ..	a=ア	an-/-an	bi :MON
ワ		au のメタテーゼ形			< anuu/banu/baN	OJ: ミ<*bi/*man(TU)
ミ					wan	OJ: ナ<na(アkor)
ナ						

(2) 基礎語彙No.82 火 : fire から

村山七郎によると日本語「火」、アイヌ語 ape は下記のような変化の結果であると言われている。

ヒ < pīi < poi < apoi < *apuj
ape < apoi < *apui

アイヌ語、日本語はタガログ語レベルまでは同じで、日本語はそれ以降3回以上の変化を経たであろうのに対して、アイヌ語は1回の重母音から短母音への変化のみであり、古い形を保持してきたことが見て取れる。ところが日本語にもアイヌ語にも祖語の形を受け継いでいる言葉もある。祖語の apu- の形は日本語「アブ(灸)・ル」は

abu- < apu-

であり、鹿児島弁では「アブイ」、沖縄語では abujuN である。

アイヌ語 uhuy:燃える は、

uhu- < apu-

である。いずれにしても *apuj のもとの形からの派生と考えられる。

また、ポリネシア諸語であるハワイやマオリ語では、afi, api と語頭の a- は維持しているが -fi, -hi は日本語が「ヒ」へたどり着いたと同じような簡易な音韻への変化の結果であろう。ただし、こちらから kāpura のように -apu- の古い形も残している。

これらのアイヌ語に対する判定結果は下記の通り。

表 4. アイヌ語の 火 : fire 類縁判定結果

表6.82.2 アイヌ語の親縁関係の判断結果

	南島祖語	イ・比諸語	台湾諸語	日本古語	沖縄諸語	アルタイ語派
アイヌ語 ape	○ *apuj	○ apoy など	○ apoy/hapoy など	○ ヒ と同源	○ pii などと同源	- tuwa /tuwe :MAN bʀl /pul :KOR gal :MON
uhuy	*apuj	apu/apoy	hapui など			

表 5. 日本語の 火 : fire 類縁判定結果

表6.82.3 日本語の親縁関係の判断結果

	南島祖語	イ・比諸語	台湾諸語	アイヌ語	沖縄諸語	アルタイ語派
日本古語 ヒ	○ *apuj	○ api/apoʔ など	○ apui/?a:pui など	○ ape	○ hwii/pii	- tuwa /tuwe :MAN bʀl /pul :KOR gal :MON
アブル	*apuj	apu など	apui/?a:pui など	uhuy		

(3) 基礎語彙No.72 日 : sun から

日本語の「ヒ(日)」に関して、南島祖語の *tʰiNaR の tʰi- からのインドネシア、フィリピン、台湾、ポリネシアなどへの派生音として si-, di-, hi-, ci- などとある。

八重山の cii, pii 沖縄本島の hwii、日本語「ヒ(日)」へと音韻変化を示しているようである。結局南島祖語の *tʰiNaR の間接的な派生語と言えるのであろうが直接的な派生語としてはここでは採用しなかった。

枕詞の「シナテル」の「シナ」、「シノノメ(東雲)」の「シノ」など *tʰiNaR の反映と言われている。日本語「シロ(白)」もこの祖語が語源である。

日本語「ハリ(晴)」(「ハレ」)は意味が少しずれるが南島祖語 *vaRi の派生語であろう。マライ語の mata-hari:太陽 の後半音にほぼ同じである。

アイヌ語 nusat:明け方 は意味は少しずれるが *tʰiNaR:光 から派生のマライ語 sinar の n音 と s音が入れ変わったメタテーゼ形である。(最後の r/t の相互入れ替えは起こりやすい。)

表では *tʰiNaR の直接的な派生語として線引きしなかったが

POC(原始オセアニア語) *siNaR : 光 からの直接的な派生語として評価した。

また「何日」などの「日」を表わすアイヌ語 to は南島祖語 *a(n)dav:日/太陽 から

to < daw < *adav

と変化したと推定できる。

アイヌ語 chup の意味は 日/月/腹 であり、chupu:つぼめる とあり「丸い物」からの意味の派生で、ここでは類縁関係は認められない。

沖縄県竹富島(石垣島の南西)に伝わる恋歌、安里屋ユンタの歌詞に出てくる

「サー 君は野中の 茨の花か サーユイユイ
暮れて帰れば やれほに 引き止める
マタハリヌ チンダラ カヌシャマヨー」
最後のハヤシの部分である。「カヌシャマヨー」とは、「神様よ」と分かる。「マタハリヌ チンダラ」部分は下記のように南島語のオンパレードである。古い言葉であろう、正確に訳せている例が無いようであるが、

マタ < *mata : 目

ハリ < *vaRi:太陽

マライ語では mata-hari:太陽

ヌ 助詞「の」

チンダ < ts'inda < *tʰiNaR:光

ラ 感動詞

結局、意味としては「(自然の)目である太陽の光はね、神様であることよ」等となるのではないだろうか。

5. 4 基礎語彙調査結果

基礎語彙100語のアイヌ語および日本語（古語）の親縁関係を集計した結果は次の通り。（[2]から）

表 6. アイヌ語および日本語の親縁関係集計値（基礎語彙100語中の親縁関係認定数）

アイヌ語	南島語系統（○判定分）					アルタイ語派 （○+△判定分）
	南島祖語	イ・比諸語	台湾諸語	日本語古語	沖縄諸語	
	78/100	71/100	70/100	56/100	39/100	

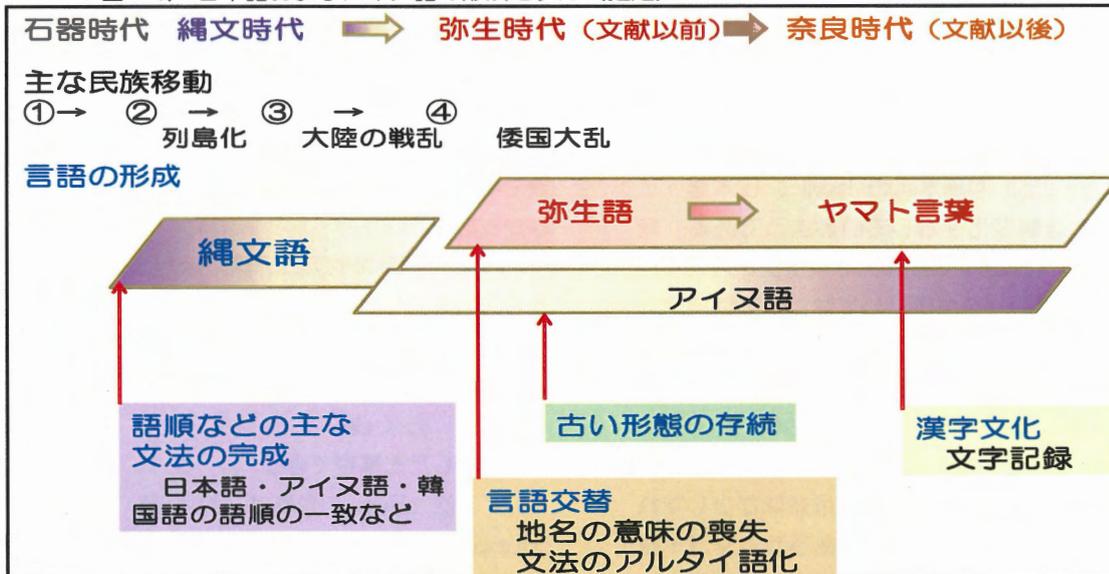
日本語古語	南島語系統（○判定分）					アルタイ語派 （○+△判定分）
	南島祖語	イ・比諸語	台湾諸語	アイヌ語語	沖縄諸語	
	79/100	72/100	63/100	56/100	94/100	

この結果は日本語もアイヌ語も同程度に南島語を起源とすることを意味する。特にアイヌ語は古く南方からの人々と共に入ってきて、縄文時代に北に達して最終的に北海道、南樺太および千島に残った、

縄文語を維持・保存した言語であろう。

図 2.に示した日本列島への民族移動の経緯と合わせて、日本語の成立モデルを下図のように推定できる。

図 4. 日本語およびアイヌ語の形成モデル（推定）



6. まとめ

本報告は拙書『日本語の起源とアイヌ語』[2]の中から紙面の都合上、考え方と方法、具体例および結果のみ示した。日本語の起源を考える上でアイヌ語が鍵を握り、図2.および図4.の日本民族の主な流れのうち②および③の流れが縄文時代の主流をなし、アイヌ語に残され、その後の④の流れが弥生文化をもたらし、日本語がアルタイ語化していったものであろう。

この結果は鳥居龍蔵の言葉「日本の先住民族はアイヌ」[5]の言葉通りであり、従来の歴史学、民族学、言語学などの見直しが必要なることを示すものであろう。

発表の機会を与えていただいた実行委員会、協議会の先生方に深く感謝致します。

参考文献：

- [1]永田良茂「言語年代学における日本語系統、縄文語を推定する」
人文科学とデータベース第12回公開シンポ '06/12
- [2]永田良茂 日本語の起源とアイヌ語 友月書房 '09/03
- [3]崎山 理編 日本語の形成 三省堂 '90/03
- [4]村山七郎・大林太郎 日本語起源 弘文堂 '95/05
- [5]鳥居龍蔵 有史以前乃日本 磯部甲陽堂 '18/07

その他の文献は、[1]の文献に同じためここでは省略。